



経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践

編：安酸史子
B5判・280ページ
定価：本体3,200円＋税
発行：医学書院(03-3817-5600)

多様な事例の中に自己を見つける—— 省察的実践者としての教員の学びを援助する 1冊

評者◎前川幸子 甲南女子大学看護リハビリテーション学部教授

近年、看護系大学が急増し、それに伴う教育の質をどのように担保していくのが課題となっている。そのためのFaculty Developmentの重要性は周知のとおりであるが、中でも重視したいのは、看護学実習教育である。なぜなら、看護の本質を学生と共に考えるアクチュアルな教育現場が、看護学実習だからである。本書は、この看護学実習におけるパラダイム転換を試みた1冊といえる。それは技術的合理性に基づく医学モデルからの脱却であり、学生が自らの看護実践の経験を通して看護の意味を形成していくことを重視した、「経験型実習教育」なのである。

編者であり著者の安酸は、自らの学生時代の看護学実習経験をもとに、教育・研究者として学生と向き合いながら、一貫して「経験型実習」の必要性を著書や論文を通して唱えてきた。学生の経験を基盤とする教育を推奨するのは、本書が「経験から学んでいく力」を「学力」と位置づけることに起因する。進化し続ける医療界に身を置く看護師が、生涯学習者となっていくためにこの力量は欠くことはできない。つまり、新たな知識の習得だけで看護はできず、「これは看護であるか否か」という看護哲学のもと、患者を中心に据えた倫理的判断に基づく実践こそが看護なのである。そのためには、自らの経験を振り返ることで看護とは何かを学ぶ学習者を育むための「経験型実習教育」が必要なのである。

本書は6部構成となっている。著者らは各部で

テーマを変え、事柄性を変えながら、学生の経験を大切にした実習教育を説いていく。例えば、理論に基づく看護学生の事例では、私が気になっていた学生と重なり合い、閉ざされていた関わりが鍵が開く思いがした。他方で、これまで特に気に留めてこなかった学生が浮上して、「あのとき、どのようなことを感じていたのだろうか」と気になり始めたりもした。教員の実習指導経験が喚起されるのは、学生-教員の相互作用が個別具体的に著されているからであり、多様な事例の中に思わず自己を見つけてしまうのである。

このような経験型実習の根幹となる看護技術とは、看護師の「看護観の技術表現」であり、患者と看護師との相互主体的な関わりをもとにした看護の知識、技術、態度の統一的な行動、としている。その習得には、学生が優れた看護技術に出会うこと、そしてなぜそれが優れているのかを、根拠をもって基礎教育課程で学ぶことだとしている。つまり「経験型実習教育」は、臨床看護の場だけではなく、その前段階である学内の教育課程でも、学生の経験を重視した講義・演習が必要なのである。本書では言及されていない学内授業と実習との関連性、4年間の教育課程は、本書から我々に与えられた課題といえる。学生の経験を中心に据えながら、教員が省察的実践者として自らの経験を語り合うこと、共有し合うことは、教育力の向上につながるだろう。ぜひ、手にとってほしい1冊である。